

# きょうと福祉倶楽部だより 2021年 5号

## 「家」で暮らすという事 - チームケアが支えています

病院を転々とし、5月10日、1年4ヶ月ぶりにご自宅に戻る事ができたKさん。

わたしたちがKさんをお手伝いをするきっかけは娘さんからの

「吸引のできるヘルパーさんはいませんか？」

「家に連れて帰りたい」の電話から始まりました。

お話を詳しく伺うと、Kさんは長岡京市に長く住み、主婦として三人のお子さんを育ててきた方です。脳梗塞の治療で入院してからもどんどんと思くなり、今は気管切開も尿道へのカテーテル（管）も入っている状態。喀痰の排出も多く、かなりの頻度で喀痰の吸引が必要とのことでした。そのうえ食事を経口で摂ることは出来ず、鼻腔へ通したカテーテルから栄養を流し込んでいる状態でした。

病院からは「自宅での介護は無理」と宣告をされ、家族の意に沿わぬ療養型の医療機関への転院を迫られていました。

このコロナ禍で入院中 Kさんのご様子を観察することもままならない中ですが、退院に向けて最大限のお手伝いをさせて頂くことを娘さんにお約束しました。

そこで考えた退院までのプロセス。

入院期間の制限からこれ以上の入院継続はできないKさん。

まずは、身体機能を再評価する時間を作りながら、家に帰るために必要な手立てを探す事を提案しました。

ご家族の家族会議にもケアマネジャーが参加をさせて頂き、悩んだ末にみなさんがその方針でいこうと決断されました。

Kさんは在宅復帰超強化型の老人保健施設に移り、そこで施設スタッフとわたしたちは問題意識を共有しながら、ご家庭に戻るために必要なことは何かを探しました。

ケアが病院から施設に代わる中、確実に問題も出てきました。

そして少しずつではありますが、身体にも変化が感じられました。

喀痰の量も以前と比較すると減ってきました。

食事は相変わらず摂ることは出来ませんが、

鼻腔からの栄養では無く、胃ろうを作る事で介護が安全に、無理なくできるようになりました。

身体は元気な頃には戻せません。

その中で、家族が大きな負担とならぬよう、在宅ケアチームを作り、家族の負担となるケアを分担するためのケアプランを作ります。経済的な負担も増えないように、身体障害者手帳も駆使します。

チームへ参加するメンバーは医師、訪問看護ステーション、調剤薬局、歯科医師、ホームヘルプはわたしたち「きょうと福祉倶楽部」ともう一カ所、そしてデイサービスと訪問マッサージ、福祉用具貸与事業所2カ所、総勢10カ所の事業所のネットワークが生まれました。

そんなこんなで三ヶ月を経過した5月10日、そのケアプランで支える環境を作り、ついにKさんは自宅に戻りました。

お家に戻ったKさん、久しぶりの家での暮らしが戻りました。

Kさんとはしばらくぶりに再会を果たした旦那さん、

「思った以上に顔色が良い」と笑顔。この穏やかな空気が続いていくことを願い、そして家がもつ「力」がKさんに良い変化が生まれることを願いながらチームの仲間がこれからも支えています。



有限会社 おとくに福祉研究所

きょうと福祉倶楽部

☎075-958-2560

長岡京市天神4丁目 7-12 ハイッ東台101